



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2014/01/11(土)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 136

「東日本大震災復興支援 第68回国民体育大会

『スポーツ祭東京2013』少年男子の部に参加して」

北海道少年男子監督
指導者育成専門委員 前野 和義

東京都での国体開催は昭和34年の第14回大会以来54年振りとなり、「東京に多摩に島々に羽ばたけアスリート」のスローガンのもと、成年男女は小金井市、西東京市、武蔵野市の3会場で、少年男子は立川市、少年女子は東村山市のそれぞれ5市で開催されました。2020年のオリンピック・パラリンピックの開催決定後の東京国体だけに「おもてなし」の温かい大会役員の心意気が伝わってくる大会でした。

私達の会場は立川市の泉体育館で駅より多摩モノレールで体育館までの交通の利便性も良く、大変競技のしやすい会場でした。立川市は多摩川や玉川上水、浅堀川が流れており、国営昭和記念公園という素晴らしい水と緑の綺麗な街でした。

今年度の旭川地区選抜チームの編成をするにあたり、次のような経緯がありました。地区強化委員会は日下部委員長を中心として、選抜チーム編成について2年かかりで検討をしていた。従来は高体連支部大会の優勝チームの監督及びコーチが主導となり編成を任されていたが、どうしてもスタッフと選手の選考に片寄りが生じることが多く、また全道大会で勝敗の逆転が生じたり、インターハイ出場により選考メンバーが大きく変わることもあり、例年苦慮していたことが現状であった。

そこで強化委員会として次のような方向を打ち出す。

- ① 部大会前に強化委員会が中心となり指導スタッフの選考をする。
- ② 支部大会終了後、強化委員会とスタッフが選手の選考をする。

スタッフ・選手の選考に多くの人が関わり、多くのチームより選手を選考する事により、早い時期からの強化練習が可能となることなどで、地区として全体の競技力向上につなげていくということを趣旨として、高校のチーム関係者全体の承認を受け今年度より実施されることになった。

その様な経過の中で男子監督は前野（協会）、コーチ陣は鈴木（旭大）、畑中（旭工）、マネージャー佐藤（明成）という構成でスタートをすることになる。

4校より18名の選手を選考して全道大会まで17回の練習日程を組む。チーム形態がそれぞれ違う選手がいかに結束を図り「戦う集団」として成長していくか、そのために「チーム作りの考え方」をしっかりと理解してもらうことから始まる。また、短期間で最大の練習効果を上げるために事細かな「練習の約束」を提示して、選手には窮屈なルールであったと思われるが、選手全員素晴らしい行動力で実践してくれたことで、大変スムーズな練習を展開できる。質の高い練習と向上心の高揚のために、練習開始前には前日のログブック（練習の個人記録）をそれぞれに読んでもらい、練習後は記録を書き提出させ、こちらの思いも書き込みながら技術の受け渡しが一方通行にならないよう配慮した。

その結果、徐々に選手の責任感と共同心が育ってきたように、練習の中でも感じるようになる。また、強化向上の最大の要因は成年男子チームとのゲームであった。夜間も含め大会前日まで相当な回数、無理をいって胸を貸して頂きチームコンディションの確認ができたことは大きな成果につながった。成年男子チームには心より感謝をしたい。

しかし、良いことばかりではなく、練習中に1名の骨折者を出してしまい、また大会前日にスタートメンバーの2名にアクシデントがあり、選手変更をせざるおえなくなる。チーム内に相当なダメージが予想されたが、その困難をプラスに転換してより一層の強いチームの結束が出来たことは、このメンバーのメンタル的にも成長した姿であると感動させられる。

『ただ勝てばいい、ただ点を入れればいいのではなく、どうせやるならカッコ良く勝ちたいし、格好良く点を入れたいものである。コートに立つ姿が凛々しく、そしてチームとして観ている人をも納得をさせる試合をしよう。』と望んで大会であったが、現実は大変厳しいゲームになる。準決勝は帯広選抜に快勝した釧路選抜にやっとの思いの勝利で、決勝は順当に勝ち上がってきた東海大四高校を中心とした札幌選抜であったが、スタートの勢いが前半を支配しリードして終了する。

しかし、3クォーター札幌の気迫のフルコートプレスに苦しめられ同点まで追い上げられる。そして、4クォーターの混戦でディフェンスが功を奏し、一步抜け出した旭川が運良く逃げ切ったという感じであった。

勝つゲームというのは打つ手が全て上手くいくもので、本当に運というものを感じた試合であった。旭川協会設立60周年に当たる今年に、成年男子共々優勝できたことは大変嬉しいことであった。

北海道選抜チームを編成するにあたっては、本番までの練習が土日の7回しかなく、また途中、全道選抜大会の地区予選もありなかなか落ち着いた練習が出来ないため、現在のチームスタンスを維持することにし、他地区からの補強はしないことで本番に向かうことに決める。

初戦の組み合わせが優勝候補の一角の福岡（今大会の準優勝チーム）と決まる。福岡第一と大濠との混成のU-18メンバーをそろえたチームであり対戦が楽しみになる。

大会前に道体協の援助を頂き事前合宿を組むことができた。大会4日前に東京都内に宿舎をとり最終的な強化と調整が出来たことは、チームにとっても大変大きな収穫となった。

初日は八幡山の日大の体育館を借りて調整練習をさせてもらい、2日目は市立船橋高校近藤先生のお世話でゲームを組んで頂き、3日目は八王子高校の石川先生にお願いして、佐藤久夫先生が率いる宮城選抜も来場されていたこともあり、それぞれに胸を借りての大変有意義な事前合宿を体験することができたことは、大会前だけに選手共々大きな刺激に

なる。そして、今回の合宿にご尽力を頂いた池田俊尚氏、大久保高明氏には心よりの感謝を申し上げたい。

大会前日に立川に入り、公式練習会場で確認のための練習と雰囲気作りをして、いよいよ大会当日を迎えることになった。

第一試合ということで会場体育館では開試式があり、国民体育大会の雰囲気をあらためて味あわせて頂き、選手共々とても良い思い出を作らせてもらう。

開試式で挨拶をして頂いた野村俊郎国体委員長と副委員長の齋藤徳也氏（東京都理事長）は昔の同僚であり、懐かしい両氏との再会も私にとっては思い出深いものになる。道協会の森野理事長も会場に応援に駆けつけて頂き、2階スタンドには地元の小学生が応援席を埋め尽くして会場の雰囲気を盛り上げてくれた。

会場の役員の多くはボランティアの方々で占めており皆様の温かい運営振りに感謝をしながら試合ができた。

ゲームは能力と総合力に勝る福岡の勝利であったが、北海道の多彩な攻めに前半は互角のゲームを展開でき、3クォーターで引き離されたものの、最後まであきらめない戦いぶりは多くの人に賞賛を受ける。

結果的には下記のスコアであったが、私が彼らに求めた「魂のこもったバスケットボール」を展開してくれたものと合格点を上げたいと思う。個々の能力の高さを思う存分発揮した東京、福岡、そしてチームとしてしっかりゲームを機能させていた宮城（明成）、京都（洛南）、富山等が印象に残った大会であった。

東京オリンピックの誘致に成功した余韻をこの国体開催に反映させて素晴らしい運営をしていた実行委員会の皆様に心よりの感謝を申し上げます。

		2 2 - 2 2		
		2 0 - 2 5		
北海道	7 1		1 0 2	福岡県
		1 1 - 2 8		
		2 4 - 2 7		
			優勝 東京都	準優勝 福岡県

今回のゲームを仕切って頂いた審判員は渡辺 亮氏、谷古宇 孝氏の両氏でした。常にコート内外に気配りを示しながら温かい気持ちが伝わってくるとてもゲームのしやすい環境を作ってくれました。『ゲームを見守る』という姿勢を肌で感じさせてもらい、高校生が思う存分プレーが出来ていたことに感謝をしたいと思います。

我が北海道の阿部聖氏の審判の観戦もすることができ、自然体でゲームに溶け込み大変落ち着いたレフリーぶりを見せてもらいました。その貴重な体験を道内の審判員資質向上に大きく貢献してもらうことを心より願うところです。

最後になりますが福岡の監督は福岡第一の井手口先生でありましたが、U-16男子アジア選手権のヘッドコーチとして派遣されていたので、今大会は直方高校の文野コーチが代わりのベンチに立っていました。重責の中で大役を全うしての準優勝であったと思います。ご苦労様でした。また、大会中に韓国とタイペイに勝利したU-16チームが3位入賞を決め、14年振りの世界大会出場決定の朗報を井手口監督から電話で受けました。本当に久々の素晴らしい快挙に大いに拍手を送りたいと思います。

これからの日本男子チームの強化発展のきっかけになればと切実に願いながら国体の感想報告とさせていただきます。

選手一人ひとりが、ゲーム中1秒の例外もなく

明確な意志を持ち続けなければ

成立しないスポーツである

解答はプレーヤー自ら出さなくてはならない

バスケットボールは同じ局面が無い以上

解答は無数にある

プレーヤーは無数の解答の中から

チームが要求している

ただ一つの正解を見つけなければならない

バスケットボールのおもしろさは

この『主体性』にある